

「男4人、何も起きない日のはずだった」

午前10時。ヨルファミリア本部・大食堂の一角。珍しく任務なし。訓練もなし。緊急招集もなし。男4人が、ただダラダラしていた。ソファにはゆーカス。その隣にいんカス。向かいにはトムカス。そして床には――

「なんで僕だけ床ゴマ？」

ごま塩。

「そこにクッションあるじゃん」

ゆーカスが指差す。

「そういう問題じゃないゴマ。ソファ空いてるゴマ」

実際、ゆーカスの反対側は空いている。

「じゃあ座れば？」

「座るゴマ」



ごま塩が立ち上がる。すると、いんカスが何気なくゆうカス側へ寄った。ゆうカスも自然にいんカス側へ寄る。結果、二人の間隔、ほぼゼロ。

「……………」

ごま塩が止まる。

「何ゴマ、その距離」

「ん？」

「何が？」

二人とも本気で分かっていない顔。

「いや近いゴマ」

「いつもこんなもんじゃね？」

「うん」

「……………」

ごま塩はトムカスを見る。



「トムカス」

「俺に振るな」

「こいつら距離感壊れてるゴマ」

「知ってる」

「なんで誰も直さないゴマ？」

「もう諦めた」

「ヨルファミリア、諦めるの早すぎゴマ」

昼前。

「腹減った」

ゆーカスが呟いた。

「俺も」

いんカスが即答する。



「何食う？」

「なんでもいい」

「じゃあラーメン」

「いいね」

「……………」

ごま塩が二人を見る。

「意思決定早すぎゴマ」

「長年組んでるからな」

「大体分かる」

「熟年夫婦ゴマ？」

「違う」

「違う」

完全に同時だった。



「息まで合ってるゴマ」

トムカスが立ち上がる。

「俺もラーメンでいい」

「じゃあ四人分作る？」

ゆーカスが言う。

「誰が？」

いんカス。三人の視線が——ごま塩へ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「なんで僕を見るゴマ」

「荷物持ちだし」



「料理係ではないゴマ！」

「ごま塩ならできる」

「謎の信頼やめろゴマ！」

結局。四人で作ることになった。

キッチン。トムカスが鍋を担当。ごま塩が具材担当。ゆーカスといんカスは——

「……………」

「……………」

「お前ら何してるゴマ？」

「ネギ切ってる」

ゆーカスが答える。

「一人で十分ゴマ」



「俺が押さえて」

「俺が切る」

「共同作業にする必要ないゴマ！」

「効率いいだろ」

「むしろ悪いゴマ！」

トムカスは無言で麺を茹でている。

「トムカスからも言ってやるゴマ」

「……」

「トムカス？」

「……レモンってラーメン何味好きなんだろうな」

「今その話してないゴマ」

「今度聞いてみるか……」

「帰ってこいゴマ！！」



昼食。四人でラーメンを食べる。

「うま」

「普通にうまいな」

「やればできるゴマ」

「……………」

トムカスだけスマホを見ている。

「トムカス？」

「……」

「トムカス」

「……」

「おいゴマ」

「ん？」



「さっきから何見てるゴマ」

トムカスがスマホを伏せる。

「別に」

「怪しいゴマ」

ゆーカスが覗き込む。

「レモンからメッセージ来てるじゃん」

「おい」

いんカスも覗く。

「『今日暇？』だって」

「読むな！」

「おお～」

「おお～」

ごま塩まで乗ってくる。



「おお～ゴマ」

「お前らやめろ」

「返信しないの？」

「今考えてる」

「何分考えてる？」

「……十二分」

「長っ」

ごま塩が呆れる。

「『暇』でいいゴマ」

「いや、それだと素っ気なくないか？」

「じゃあ『暇だよ』」

「軽すぎないか？」

「『暇です』」



「他人行儀だろ」

「『暇だぜ！』」

「キャラが違う」

「面倒くさいゴマ！！」

トムカスは真剣な顔でスマホを睨んでいる。

「……『今日は特に予定ないけど、どうした？』」

三人が黙る。

「……………」

「……………」

「……………」

トムカスが顔を上げる。

「何だよ」

ゆーカスが頷く。



「普通」

いんカスも頷く。

「普通」

ごま塩も頷く。

「十二分悩んだ結果、普通ゴマ」

「うるさい」

送信。

ピコン。

即返信。トムカスの表情が一瞬で変わる。

「何て？」

「……『じゃあ後で一緒に出かけない？』」

「おお～！」

「おお～！」

「おお～ゴマ！」

「うるせえ！」

午後1時。トムカスは鏡の前にいた。

「これでいいか？」

ゆーカス、いんカス、ごま塩が後ろに並ぶ。

「いつも通り」

「いつも通りだな」

「いつも通りゴマ」

「……こっちの上着は？」

着替える。

「いつも通り」

「いつも通り」



「いつも通りゴマ」

「じゃあ髪——」

「もう行けゴマ！！」

ごま塩が背中を押す。

「待ってって！」

「レモン待たせる方がダメゴマ！」

「そうだぞ」

「行ってこい」

三人がトムカスを玄関から追い出す。ボタン。静寂。

「……………」

「……………」

「……………」

ごま塩が振り返る。



「さて」

ゆーカスといんカスを見る。

「三人になったゴマ」

「そうだな」

「何する？」

「ゲームでもする？」

「やる」

また即決。

「だからお前ら会話短すぎゴマ」

午後3時。ゲーム開始から二時間。

「右！」

「分かってる！」



「後ろ！」

「任せろ！」

「ナイス！」

「そっち頼む！」

「了解！」

ゆーカスといんカス。完璧な連携。一方。

「助けてゴマァァ！！」

画面端でごま塩が敵に囲まれている。

「ちょっと待って」

「今そっち行く」

「早くするゴマ！！」

数秒後、二人が同時に突入。敵を一掃。

「助かったゴマ……」



「ごま塩突っ込みすぎ」

「単独行動するから」

「お前らの連携がおかしいだけゴマ！」

次の試合。

「いんカス」

「ん」

それだけでいんカスが左へ移動する。

「ゆーカス」

「はいよ」

それだけでゆーカスが右をカバー。

「……………」

ごま塩がコントローラーを置く。

「もうテレパシーゴマ」



午後6時。玄関が開く。

「ただいま」

トムカスが帰ってきた。三人が振り返る。

「おかえり」

「どうだった？」

「どうだったゴマ？」

「普通だよ」

トムカスは平静。

「へえ」

「ふーん」

「そうゴマ」

三人はゲームへ戻る。十秒後。トムカスが小さく言う。



「……次も誘ってくれるって」

三人が振り返る。ニヤァ。

「何だよ」

「いや？」

「別に？」

「何でもないゴマ？」

「その顔やめろ」

「楽しかった？」

「……まあ」

「レモン可愛かった？」

「……………」

沈黙。トムカスの耳が少し赤い。ごま塩が立ち上がる。

「はい確定ゴマァ！！」



「うるせえ！！」

夜。四人で夕飯。トムカスの話を散々いじったあとようやく静かになる。ゆーカスが唐揚げを一個取る。いんカスも同時に同じ唐揚げへ箸を伸ばす。二人の箸がぶつかる。

「……………」

「……………」

ゆーカスが手を引く。

「食べよ」

「いいの？」

「うん」

「ありがと」

「……………」

ごま塩がじっと見ている。



「何？」

「どうした？」

「いや……」

ごま塩は考える。トムカスはレモン。ゆーカスはいんカス。
いんカスはゆーカス。そして自分は——

「……………」

自分の隣を見る。誰もいない。

「……………」

唐揚げを見る。最後の一個。

「少なくとも僕にはお前がいるゴマ……」

箸を伸ばす。その瞬間、ひょい。トムカスが最後の唐揚げを
取った。

「……………」

ぱくっ。



「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

ごま塩が立ち上がる。

「僕の唐揚げええええええ！！！」

「早い者勝ちだろ」

「返せゴマ！！」

「もう食った」

「許さないゴマァァァ！！」

ごま塩がトムカスを追いかける。

「待てゴマァ！！」

「嫌だよ！」



ドタドタドタドタ——！！それを眺めながら、ゆーカス。

「平和だな」

いんカス。

「平和だね」

二人は顔を見合わせる。

「ゲーム続きやる？」

「やる」

今日もヨルファミリアは平和だった。たぶん。そしてごま塩はこの日、

最後の唐揚げを食べられなかった。

「全然平和じゃないゴマアアア！！」

